

弥生ファッション

弥生時代の人々は、様々な素材・形の装身具を身につけ、ファッションを楽しんでいました。基本展示室にも朝日遺跡出土の装身具が展示しておりますのであわせてご覧ください。

髪を飾る



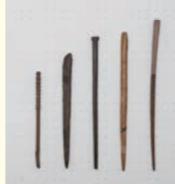
19 ◎堅櫛(未成品か)
八日市地方遺跡
(弥生中期/小松市埋蔵文化財センター蔵)



20 ◎堅櫛
朝日遺跡
(弥生中期/当館蔵)



21 かんざし
瓜生堂遺跡
(弥生前期～中期/東大阪市蔵)



22 かんざし
朝日遺跡
(弥生中期/当館蔵)

身を飾る



23 復元した身分の高い
人の綿の服



24 弥生時代の人々
(朝日遺跡クローズアップ模型 農地での活動より)



25 復元した庶民の麻の服
(朝日遺跡/東大阪市蔵)



26 勾玉と管玉 八日市地方遺跡
(弥生中期/小松市埋蔵文化財センター蔵)



27 ◎さまざまな玉類 唐古・鍵遺跡
(弥生中期/田原本町教育委員会蔵)



28 ◎勾玉と管玉 朝日遺跡
(弥生中期/当館蔵)



29 骨角製装身具 水走遺跡
(弥生前期/東大阪市蔵)



30 ◎垂飾 朝日遺跡
(弥生中期/当館蔵)



沓を履く



32 ◎木製履物 八日市地方遺跡
(弥生中期/小松市埋蔵文化財センター蔵)

19・32小松市埋蔵文化財センター写真提供 / 20～22・24・27～31当館撮影 / 23・25佐賀県文化課文化財保護・活用室写真提供 / 26田邊朋宏撮影

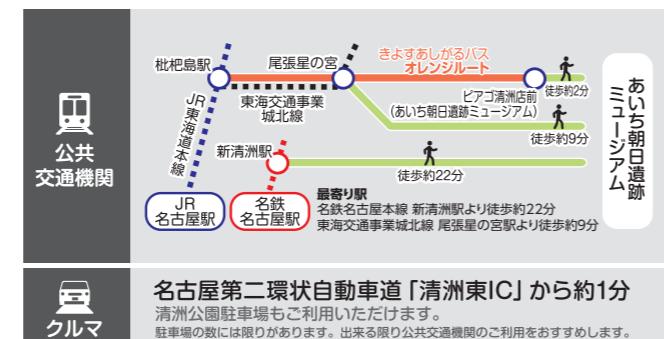
- 凡例**
- ・本書は2025年10月18日から12月14日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「弥生ファッション～紡ぐ、織る、染める」の展示パンフレットである。
 - ・本展示の時期区分は、弥生時代前期（B.C.6～B.C.4c）、中期（B.C.4～B.C.1c）、後期（A.D.1～B.C.2c）、終末期（A.D.2～3c）とするが、各地域の並行関係は厳密なものではない。
 - ・掲載資料のうち、重要文化財には「◎」を付している。
 - ・本書の執筆・編集は、松本彩が行った。

あいち朝日遺跡ミュージアム

■愛知県清須市朝日貝塚1番地 ■TEL: 052-409-1467 ■駐車場 15台

企画展「弥生ファッション ～紡ぐ、織る、染める」

編集・発行：あいち朝日遺跡ミュージアム
2025(令和7)年10月18日発行



あいち朝日遺跡ミュージアム企画展

弥生ファッション

紡ぐ

はじめに



1

織る



2

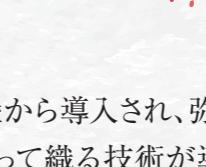


3

染める



4



5

布を織る技術は、縄文時代の終わり頃に大陸から導入され、弥生時代に全国へと広まりました。縄文時代にも編む技術はありました。機織り具を使って織る技術が導入されたことは、布づくりへの画期的な進歩だったと考えられ、それ以後、目の細かい布は機織り具でつくられるようになりました。

本企画展では、弥生時代の遺跡から出土した布づくりに関する道具や、布の痕跡が付いた土器などを展示し、弥生時代の機織りの技術や染色の技術を紹介するとともに、当時の人々が身に着けていた様々な装身具を展示し、弥生時代の人々がどのようにファッションを楽しんでいたかを紹介します。

1 ◎樹皮製品 八日市地方遺跡(小松市埋蔵文化財センター蔵・写真提供)

2 軸付紡錘車 鬼虎川遺跡(東大阪市蔵)

3 ◎鯨骨製紡錘車 唐古・鍵遺跡(田原本町教育委員会蔵)

4 布送貝 疊遺跡(米原市教育委員会蔵)

5 ◎緯打具 朝日遺跡(当館蔵)

6 経送貝 八日市地方遺跡(石川県埋蔵文化財センター蔵・写真提供)

機織り模型(田原本町教育委員会蔵写真提供)

紡ぐ

布の素材には動物性の纖維と植物性の纖維があります。動物性の纖維が蚕からとれる絹で、出土した植物性の纖維には、大麻、苧麻(カラムシ)、赤麻、カジノキ、クズ、コウゾなどがあります。

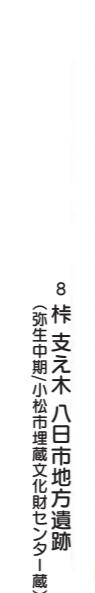
樹皮あるいは蔓などの素材は巻かれた状態で発見されることがあります。編みものに使われたのか、織りものに使われたのか同定することは困難ですが、素材の種類によっては、採取してからしばらく巻いて保管していたようです。

絹糸は、その性質から撚りをかける必要がないため、おそらく紡錘車は植物纖維に撚りをかける道具だったと考えられます。植物纖維はガサガサの纖維の束で、これを適切な細さに裂いて長くつなぎ合わせて糸を作ります。このつなぐ作業を「績む」と呼びますが、績んだだけの状態の糸は強度が足りないため、これに紡錘車を使って撚りをかけることで、強い糸を作ります。

紡錘車の軸は、弥生時代は木製のものだったと考えられますが、木製品は水分が豊富な状態でないと残存しないため、土製、石製などの紡錘車のみが残存することがほとんどです。



6 柄に巻き上げる
(東村2011に加筆)



7 輪状に経る
(東村2011に加筆)

織る

糸を紡ぐ際、植物纖維は水分をふくませて撚る必要があります。撚った糸は、棒とよばれる道具に巻き付け、乾燥させます。棒にかけることで、最終的に輪状の糸束になります。これをひねってまとめ、そのまま保管することができます。この糸束は糸の分量をしめし、織物に必要な分量をそろえる目安にもなっていたと考えられています。

棒は、手で持つ支え木と糸をかける腕木からなります。棒には、腕木に孔をあけ、支え木を差し込むタイプと、支え木に孔をあけ腕木を貫通させるタイプの2種類があります。

機織り具に糸束をかける前には、経糸を揃えるため、棒から整経台へ糸をかけかえる必要があります。



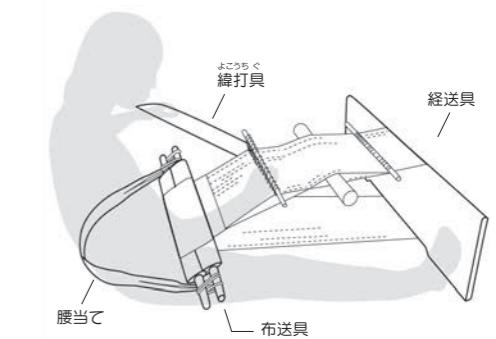
9 ◎柄 腕木 八日市地方遺跡
(弥生中期/小松市埋蔵文化財センター蔵)

右のような形で布を織るその織り機は、輪状式原始機と呼ばれています。

布送具は2つをセットで組み合わせて使用します。布送具の組み合わさる部分には、一方が凹部、もう一方が凸部をもち、間に布をはさんで固定させることができます。布送具の両端に紐をかけ、腰当てと結び、足下は経送具を直接足で突っ張ると、布が経送具の上下を一周して布送具につながり、横から見ると輪状になっています。

織り上がる布幅は、布送具の布幅から30cmから40cm前後となります。また、布を挟んで輪状に経送具にかけて布を織ったと考えられるため、織ることのできる布の長さは、織り手の足の長さのおよそ2倍ほどです。

八日市地方遺跡の経送具は、現存する最古級のものです。布を通す下部には割り込みがあり、この形は古墳時代まで変わらずに受け継がれています。



10 布を織る
(東村2011に加筆)



11 布送具 碇遺跡
(弥生時代前期~/米原市教育委員会蔵)



12 経送具 八日市地方遺跡
(弥生時代中期/石川県埋蔵文化財センター蔵)



13 ◎縫打具 朝日遺跡
(弥生時代中期/本館蔵)

染める

布が残存する事例はそれほど多くありませんが、出土した布の分析から、弥生時代の人々が染色した絹糸を使った衣服を着ていることもわかつてきました。吉野ヶ里遺跡で出土した布からは、日本茜とアカニシガイによって絹糸を染色していたことがわかつています。日本茜で糸を染めるには、纖維に色を定着させる働きをする媒染剤を使う必要がありますが、媒染の材料として代表的なものが、ツバキの生葉です。媒染により発色が変わるものもあるため、当時の材料でも私たちの想像以上に様々な色が使われていたかもしれません。



15 染色した絹糸
(深澤芳樹蔵)



16 アカニシガイ 朝日遺跡
(弥生/本館蔵)



17 日本茜 小松市にて撮影



18 椿 当館にて撮影